

令和7年度 特別の教育課程の実施に係る自己評価・学校関係者評価結果
国立大学法人熊本大学教育学部附属小学校

1 特別の教育課程の概要

令和8年度に開設する国際クラスの開設に向け、令和7年度は第1学年の1クラスにおいて、音楽と体育を英語による教育、いわゆるイマージョン教育を実施する。

2 学校評価（自己評価・学校関係者評価）

（1）自己評価

- ・最初は戸惑いや英語を理解できない児童も多かったものの、ジェスチャーや視覚的補助を活用しながら一貫性を大切に粘り強く続けたことで少しずつ英語での指示にも慣れ、理解度の向上が見られた。
- ・英語力の向上ではなく教科の内容や安全面を最優先としたことで、使用頻度や場面が限られ、より高度な英語力の運用までには至らなかった。
- ・多様な背景の児童と一緒に学ぶ環境の中で、少しずつ英語での環境に慣れていく姿が見られた。
- ・本年度は限られた教科のみの試行的な実施であったが、児童の適応能力の高さを実感し、次年度以降の環境整備の参考となった。

（2）学校関係者評価

●保護者アンケートから（実施学級の学校評価（保護者用）結果より）

- | | |
|--------------------------------------|--|
| ☐ 学習の充実度 A | ☐ 児童の主体性 A |
| ☐ 児童の協調性 A | ☐ 人間関係 A |

※肯定的回答の割合で判断。

[A A : 95%以上、A : 90%以上、B : 80%以上、C : 60%以上、D : 60%未満]

☐ 英語での授業、指導等については、

「日本人教師と外国人教師の二人体制で指導にととても満足している」

「日常の中で自然な英語に触れる機会があるのでありがたい」

「文化的な違いなどもフォローがあるので役立っている」

「今後は算数や理科などの教科でも英語で授業があればよい」

といった声があった。

●外部有識者等（国際クラスアドバイザー等）から

- ・英語そのものを教えることなく、自然に英語を理解し動けるようになったのは、実際の学習場面の中で状況に応じた英語を意図的に繰り返し使い続けたからで、一定の効果が見られる。
- ・児童へのインプットは、理解可能なものである必要がある。実態に応じた足場架けを効果的に行いながら進めるとよい。
- ・低学年でしっかり英語の基礎を付ける必要がある。
- ・次年度以降は、英語で抽象的な考えができるようにすることを目標にすることが望ましいが、それには相当な時間がかかる。長期的なスパンで指導をしていくとともに、関係者間でもその共通理解が必要。